

2018年09月11日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【マイナー・カレンシー】

日本で「為替レート」と言う場合、通常はドル/円 (USD/JPY) レートを指します。

しかし、マーケット (外国為替市場) で取引されているのは、もちろんドル/円だけではありません。

マーケットでは、世界中のさまざまな通貨が取引されており、「それぞれの通貨」対「それぞれの通貨」のレートが成り立っています。

世界中のマーケットで、多くの市場参加者が、頻繁に売買している通貨を「メジャー・カレンシー (Major Currency/主要通貨)」と呼びます。

現在、メジャー・カレンシーは、ドル (USD)、円 (JPY)、ユーロ (EUR)、ポンド (GBP)、スイス・フラン (CHF) を指します。

オーストラリア・ドル (豪ドル・AUD) をメジャー・カレンシーに含める人もいますが、私個人の考え方、感じ方では含めない方がよい、と考えています。

リクイディティ (Liquidity) のない通貨は、国際的な信用に裏打ちされ、流通・通用するという機能をまっとうしておらず、メジャー・カレンシーとは呼べない、と考えているからです。

メジャー・カレンシー以外の通貨は、「マイナー・カレンシー (Minor Currency/非主要通貨)」と呼びます。

+++++

では、「リクイディティ」とは何でしょうか。

「豊富に取引されていて、世界中に多くの市場参加者が存在しており、売買したいときにいつでも、世界中のマーケットで、すぐにその時の気配値で取引が可能なこと」を「リクイディティがある」と言います。

「リクイディティのない通貨」は、もの、品物、商品と一緒にです。

リクイディティのない通貨の取引は、商品取引に近いと言えるでしょう。

取引の参加者が普遍的ではなく、一部に限られているからです。

取引参加者が限定的であるということは、取引できる時間帯が限定される、ということです。

参加者が多くないので競争の原理が働かず、取引されるプライス（価格）の спреッドがワイドになります。

「ビッド（Bid／買値）」と「オファー（Offer／売値）」の「spreッド（Spread／開き）」が広がるわけです。

とはいえ、決して、そういった通貨を馬鹿にしているわけではありません。

そして、もちろん、商品取引が外国為替取引に比べて劣るなどとも思いません。

「取引参加者が少なくて、自由に売買ができない」

「取引に制限がある」

「通貨供給量が少ない」「十分な売買環境が整っていない」

「その通貨を発行している国（国々）が何らかの規制をしている」——。

そういった通貨が、「リクイディティのない通貨」です。

+++++

通貨とは、

「それに価値があるという信頼」

「その国家に対する信任」

に基づいています。

つまり、「通貨」は「国家」なのです。

自国内だけで流通させることが主目的の通貨は、メジャー・カレンシーの要件を備えてい

ません。

私の考え方では、オーストラリア・ドルは、マイナー・カレンシーに含まれます。

マイナー・カレンシーを取引する場合は、相応の知識やテクニックが必要です。

ただし、マイナー・カレンシーは、メジャー・カレンシーに比べると、情報量が圧倒的に少ないというデメリット（短所・欠点）があります。

そういったデメリット（短所・欠点）も十分に理解した上で、取引に臨むことが要求されます。

+++++

そう考えると、何の裏打ちのない「仮想通貨」は、通貨の要件を満たしていません。

つまり、「仮想通貨」には、通貨という名称が付与されていますが、「仮想通貨」は、通貨ではない、と考えます。

「仮想通貨」は、投機の対象にはなるのですが、「仮想通貨」の根源的価値が、どこにあるのか、理解できません。

「仮想通貨」のファンダメンタルズを考察することができないからです。

+++++

(2018年09月11日東京時間14:00記述)